

知恵がハンデを凌駕する

松本 康子

「大人の知恵で賢く英語を使う」ことで、言葉のハンデを凌駕できますよ！

<五千ドルが五百ドル、しかも・・・>

冒頭からお金のお話で失礼。アメリカがネゴシエーション（カタカナ英語の方がイメージし易い）の国だと、強烈に刷り込まれてしまう経験を、実際に私自身が体験したという話から。

留学してきて間もなく第二子が誕生しました。この子に、頭部皮下出血や足頭部に少し異常が認められたことと、生理的黄だん症状があり、出産の数時間後には検査室や治療室へ。

幸いにも、検査結果は成長すれば問題はなくなる程度の軽い症状だということで、黄だんも治療で完治し、親子とも無事退院できることになりました。さすがに全米でも優秀さを誇るUCLAの大学病院。生まれてくる子に何かあったらと、その対応のために選んだ甲斐がありました。そして、退院手続きに会計へ。長女も日本で黄だんやいろんな検査を受けた経験があり、出産費用以外のことは大して気にかかっていません。

ところが、なんと請求額が五千ドル！（1ドル、260円の時代）学生健康保険なんて、あって無きが如し。とにかく、そんな額はすぐ払えない。留学生活ですから、経済負担で学業途中にして帰国となっは大変です。出産後のヘロヘロの身を引かずって、巨大な大学の病院システムを相手に、当たって砕ける気持ちで交渉の場の相談窓口へ。

夫がこの大学の学生だということと、収入と支出状態の現実（毎月、ほぼ互角の戦い）をしゃべれるだけしゃべり、「とても払えない」と直訴しました。何が功を奏したのか、何とその場で十分の一の五百ドルになりました。これで、やっと退院まで漕ぎつけました。

<何でもあり！ そのころは>

五百ドルにびっくりしてもいられません。もっとも困難な交渉が控えています。退院後すぐに、ローンにしてもらえうにはどうしたらいいか、友人たち（みんな同じように貧乏学生）と相談してみました。英語の文法や交渉に効果的な文の書き方など、知恵を授かって、希望額で要請の手紙を病院へ送付。すぐに病院から電話がかかってきました。

「例外は認められないが、百ドルずつのローンにしましょう。」「ありがとうございます。それでも留學生（F1ビザ）である私たちの家計には荷が重い。」「それなら、いくらなら払えるの。」「やった！」「月に十ドルくらいなら・・・。」「冗談やからかいと思われたらしく、「そんな前例はない、五十ドルでどうかな？」交渉すべき立場が逆転してますね。

結局、二十五ドルで合意。学業途中での断念・帰国という幕を引くことは大学病院の本意ではなかったのでしょうか。（自分の言いたいことしか言えないという、究極のハンデ英語パワーの勝利か！）

嬉しい結果となりましたが、どうしてアメリカでは、交渉しだいでこのようなことが出来るのか、という疑問が残りました。

その疑問への回答は、三女の出産にありました。次女の出産がいい経験になりましたから、同じような事態になったときのために、三女の出産は事前に準備万端しておくことにしました。アメリカでは、かかりつけのお医者様なら、どんな悩みや問題も相談に乗ってくれると言うので、半信半疑で聞いてみました。「あなたのケースなら、一切費用がかからないよう手続きできる

